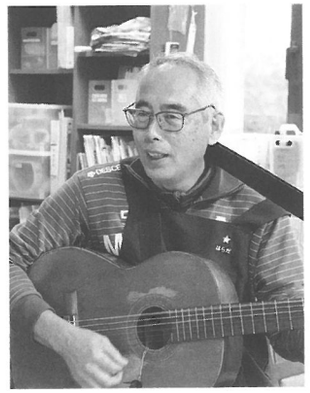
# 私に人生と言えるものがあるなら




**原田文孝**

はらだ　ふみたか／1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかかわり続ける。NPO法人ささゆり会代表


## 第10回　明日がある

私は、1979年、養護学校義務化の年に教員になりました。この時代は、学校づくりのとりくみが全国で模索されていました。村山士郎等編著『学校の再生』（1984）には、現状認識が「学校には、競争主義と管理主義が横行し、非行と校内暴力の嵐がふきあれ、授業の成立しない状況がまん延し、教師の苦悩が深まっている。自分の仕事にゆきづまり、『教師をやめたい』というつらい心をかかえて学校にきている教師が増えている」と記されています。40年以上経っても、学校の現状は改善されていないのです。

この『学校の再生』シリーズで1番にとり上げられたのが、兵庫県北部にある日高町の府中小学校の「地域に根差す学校づくり」（森垣修、1979）でした。1970年代初めの頃、府中小学校は多くの困難を抱えていて、多くの保護者から批判をされていました。十数年の学校づくりのとりくみの中で、学校の再生を実現していったのです。

多くのとりくみがされていますが、私が注目したのは、子どもや家庭にたいする「教育調査」です。子どもや保護者にたいして生活実態を聞きとるアンケート調査を実施していったのです。このアンケート調査で生活実態と要求を把握し、これに応える教育方針をつくり、それをもとに保護者と懇談会を開催していったのです。この懇談会での合意をもとに、保護者・地域と共同の教育実践が展開されていきました。

### 保護者と共同の学校づくり

私は、この「教育調査」を土台とした、保護者と共同の学校づくりのとりくみに学んで、幼稚部・小学部の学部づくりの実践を、1985年度から始めました。

1学期のアンケート調査は、給食ボランティアです。教員の数が少なくて、給食介助をボランティアとして保護者にお願いしようとしたことにたいする意見を聞いたものでした。アンケート調査の結果をもとに、学部での方針を検討します。保護者にも結果を知らせます。そして、懇談会を開きました。懇談会の中で、教育条件の貧しい実態が共有され、介助員を増やしてほしいと要望しようということになりました。詳しい経過は省きますが、結果は10月から介助員が3人増えることになったのでした。

2学期のアンケート調査は、家庭生活の実態でした。子どもの24時間の生活を視野に入れて、子どもの生活と教育を考えようというテーマでした。今回も、アンケート結果を学部で検討して方針をつくりました。懇談会では、1部を学部懇談にして、2部をクラス懇談にしました。学部懇談は、アンケートの結果と学部の方針の話し合いでした。クラス懇談は、具体的な家庭の話が出て、時間が足りない状態でした。クラス懇談は、司会を保護者にしていただきました。

3学期のアンケート調査は、今年度の反省です。クラスや学習グループの実践、学部行事などについて意見を書いていただきます。学部では、アンケート結果について検討して、来年度の方針案を考えます。懇談会では、学部懇談でアンケート結果と来年度の学部方針案を提案します。クラス懇談で、提案を受けての話し合いを進め、来年度の学部のあり方について共通認識をつくっていきました。この懇談会は、毎回テーマを決めてとりくんでいきました。その後、懇談会は企画や運営の段階から保護者にも参加していただいて、保護者の視点でテーマを決めたり、懇談会を進めていただいたりしました。

このようなアンケート調査を土台に、学部での話し合いと保護者との懇談会を進めながら、このとりくみを知らせる学部・クラス・学習グループの通信やパンフレットづくりをしました。また、保護者と共同で通知表の改善にもとりくみました。

### 合理的配慮の要求主体を育てる

私がもう一つ学校づくりで重要であると思っていたのは、三上満さんの「学校が学校らしい学校であるためには、学校が今の社会の人間性の水準に適応する学校でなくて、一歩先の未来の社会における人間性に適応するというか、人間性の水準を先どりする、そういう学校でなければ、誰も学校を信頼してくれない。誰も学校というものを愛してくれない」（『学校とはなにか』1986）という指摘です。障害者権利条約のある時代の障害児教育に求められる「未来の社会における人間性」とは、越野和之さんの提起されている「合理的配慮の要求主体を育てる」（『子どもたちに文化を　教師にあこがれと自由を』2019）ということではないかと思います。

私は、12月号に書きました大山さんの食事での「○○が食べたい」「○○さん